



分科会 13 求められる地域連携・薬薬連携 —地域社会で薬剤師業務の展開を—

W-13-02 吸入指導に関する医-薬-薬の地域連携への取り組み

ももせ やすゆき
百瀬 泰行

信州大学医学部附属病院薬剤部 副薬剤部長

医療は患者を中心として各施設ならびに各職種が連携してフォローしていくべきことは言うまでもない。そのためには、従来の病院完結型医療から地域完結型医療にシフトし、地域連携を構築していく必要がある。また、近年は行政からの誘導もあり、地域医療への取り組みはかなりの進展を見せている。さらに、このような医療連携を円滑にするためのツールとして地域連携パスの作成が有用とされている。しかし、これら連携を構築している多くの施設の地域連携パスの内容は、医師、または看護師が関わるものがほとんどであり、薬剤師の関与が明確になっているものは、まだ多くはないと思われる。薬剤師が地域医療連携の中で、薬物治療に貢献するには、関与すべき項目や関与による有用性について、まずは医師-薬剤師間で十分に話し合っ構築していく必要があると思われる。そのためにも、薬剤師が関与することによって有用性が明らかに示せるような疾患や薬剤から、連携の話し合いを始めていくのも1つの手段であろう。今回お話しする、吸入指導に関する地域医療連携は、まさしく薬剤師の関与の有用性が十分考えられる項目であった。

ご存知のように、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患（COPD）の薬物治療において吸入薬は中心的な治療薬であり、適切な吸入指導は治療効果を上げるうえで非常に重要である。当院では、従来から院外処方も含めた外来患者の吸入指導を吸入薬初回処方時に実施している。しかしながら、継続的なフォローは十分とはいえない状況にあった。また、県内の開業医ならびに保険薬局薬剤師を対象に実施した吸入薬に関するアンケート調査の結果から、医師の吸入薬処方、薬剤師の吸入指導それぞれにいくつもの問題を抱えていることも分かっていた。薬剤師の問題としては、指導内容のばらつきや問題のある患者の情報を医師へフィードバック出来ていない等がみられた。これらの問題を解消し、患者の薬物治療のさらなる向上を目指すには、吸入薬に関する地域連携が必要であると痛感していた。そこで、当院の呼吸器内科医師と薬剤師が吸入指導に関する地域連携パスのたたき台を作成し、地域の保険薬局、病院・開業の医師に連携内容の説明を行ない、本連携に賛同する施設で、昨年4月より本地域連携の運用を開始した。

今回は、この地域連携を開始するまでの経緯（問題点の検証）、地域連携パスの内容、患者情報共有のツールとして作成した吸入手帳の内容、そして連携後の状況と今後の課題などについて報告したい。